



新人物往来社

鈴木五郎

上杉謙信異聞

——  
謀略川中島

本名，松下宗彦。大正4年東京生まれ。東京大学文学部国文学科卒。百合女子大学教授。推理作家協会々員。代表作『戦国主従』『勝カチ山』など。住所，東京都中野区白鷺2-31-7

¥ 450

---

## 上杉謙信異聞——謀略川中島

昭和44年7月1日 初版発行

著 者                    © 鈴      木      五      郎  
発行者                    菅              貞              人  
発行所                  株式 新 人 物 往 来 社  
                                会社

〒100 東京都千代田区丸の内3-2 新東京ビル  
電話 (212) 3931(代表) 振替口座 東京 151643

---

印刷／日本製版株式会社

製本／有限会社河上製本

## 序

中 島 河 太 郎

近年はまた歴史的人物像への関心が、強いたかまりを見せているといわれる。小説界でも、映画・テレビの世界でも、各種の人物に新らしい照明があてられて、それぞれかなりの評判を生んでいるらしい。

ここに紹介しようとする『上杉謙信異聞』は、上杉謙信の後をついだ景勝を主人公としているから、あるいはそういう風潮に乗じて筆を執られた作品と思われるかもしれない。しかし著者の周到な用意は、決して昨今の思いつきで始められたものではなかった。

鈴木五郎氏の作品がはじめて活字になったのは、昭和三十二年の『別冊宝石』に載ったときだから、もう十年も前のことである。氏は『宝石』の熱心な投稿者だったので、私もそのうち名前を覚えたのだが、お会いしたのはつい三、四年前であった。

ところがどうも初対面ではなさそうであった。どこかで見掛けた覚えがあるのも当然で、本名を知ったら、私の大学の先輩であった。当時の本郷の学科は、私などの専攻がもつとも多く、そ

れでも三十名程度だし、聴講には学年の区別はなかったから、一期二期上のひとでも顔くらいは知っていた。それに鈴木さんは学科対抗の野球では、代表選手だったから、なお印象に残っていたのであろう。

私は戦後間もなくから、推理小説の世界に深入りしてしまったが、鈴木氏は白百合女子大学の講壇に立ちながら、中学生以来のミステリー愛好癖が高じて、実作を試みておられたのである。

ちなみに同じ学科からは、少々先輩だが『蕘大将と匂の宮(源氏物語殺人事件)』などを書いた岡田鯉彦氏が、二、三年上級にユーモア・ミステリーで新生面を拓いた天藤真氏があった。これに歴史推理小説に旺んな意欲を燃やしている鈴木氏が加わって、異色作家を次々に生んだことになる。鈴木さんのこれまでの作品では、宝石中篇賞佳作第一席となった『戦国主従』が注目される。

小早川隆景に仕えた加治信之介を主人公にした物語だが、戦国時代の権謀術数の中で、出世と保身とを秤にかけながら、生きてゆかねばならぬ小者の武士の知恵才覚を、つぶさに描いている。その後も材をこの時代に採った作品がいくつもあるが、それには作者の大きな抱負があった。『戦国物の推理小説』(日本推理作家協会会報、昭和四十二年十二月)と題するエッセイで、次のように述べておられる。

「戦国末期の人々は、自分の命を自分の力で守っていかねばならなかった。そして、生きていくための画策には、及ぶかぎりの工夫がこらされた。それらの画策から新鮮な謎を引き出

することが可能である。

戦国期に取材して推理小説を書こうとすると、いくつかの困難に直面する。

推理小説は、科学の進歩を土台とした近代化の所産である。ホームズ、ソーンダイクの科学捜査がもてはやされたのも、故なしとしない。ところが、科学捜査を戦国物に持ちこむことはできない。(中略)

また現代と戦国末期とでは、人情にかわりはないとしても、人の生きる拠りどころに相違があり、ものの見方・感じ方・考え方に若干の開きがある。謎解きを読者に挑戦するにさいして、それらの相違や開きを作中に示しておかないと、アンフェアなインチキ勝負をいどむことになる。

——しかし、私は、これらの困難を乗り越えた先に推理小説の新しい分野が開ける、と思う。犯行の動機・手段・意図……戦国の特色に裏づけられた未開拓の材料を、当時の文書や記録の中から掘り出すことが可能である。(中略)

戦国の末期には、生命・生活の保障がない代わりに、人々は、自分の自由な考えで自分の生きる道をえらぶことができた。行きすぎた自由は必ずしも彼らを幸せにしはしなかったが、彼らの持っていた心と行動の自由、他をあてにせず自力で生きぬいて行っただけのさびしさと張り——そして、それらの奥にひそむ「さびしさ」と「むなしさ」……私は、こういったも

のを心に包みながら、創作の世界を形作っていききたいと思う。」

長い引用になったが、著者の創作衝動と意図とを、これほど明確に語っているものはない。単にミステリーの枠を抜げるというより、何よりも戦国乱世期に生きた人々に共感するものがあって、それを推理的手法により、作品化しようとする熱意は目ざましい。

その長篇第一作が本篇で、人質処遇ともいへばお子屋敷に住まう景勝の幼少時代から幕を開ける。時に訪れる父親への思慕が、殊に非業の死を遂げて以来つのもつて、その最期をめぐる謎を解き明かすことを固く誓う。

上杉謙信の姉婿である父の死の秘密を経とし、謙信の軍略経営を緯として、戦国波瀾の様相を映そうとしている。父を奪われた傷心は、叔父謙信への猜疑を深めながら、独りの途を歩かずにはおれない。

戦国武將の豪勇譚なら世上に汨濫しているだろうが、筋目正しく生まれつきながら、肉親との縁に恵まれず、周囲に心を許すことなく成長しなければならなかった一武人の人間性を掘りさげようとした本篇から、「さびしさ」と「むなしさ」をよみとられるに相違ない。

甥の目から見た謙信像も興味深いが、父親に穿をしつらえた者の仮面が剝がれるまで、戦乱流転の險路をたどらねばならぬ喜平次景勝を浮彫にしたのは、歴史推理小説の収穫と信じられる。

(昭和四十四年四月四日)

目

次

序  
中島 河太郎

序章  
二

父恋い  
五

池の水  
三

雪の中  
元

傷  
六

二つの城  
四

囲い山  
五

斬る  
三

鐘ヶ淵喜左衛門  
七

母  
六

火と水  
八

元服  
六

上杉三郎景虎  
三

中城を築く  
一三

子と父  
一五

中城を守る  
二二

|         |    |
|---------|----|
| 武田四郎勝頼  | 一六 |
| 寂寥      | 一四 |
| 信玄挫折    | 一三 |
| 柿崎和泉守   | 一三 |
| 上杉景勝となる | 一四 |
| 甲斐府中    | 一五 |
| 輝虎願文    | 一五 |
| 妹       | 一六 |
| 直江大和守   | 一六 |
| 一殺多生    | 一七 |
| 謙信遠行    | 一八 |
| 柿崎平三郎   | 一五 |
| 和歌      | 一六 |
| 紙つぶて    | 一五 |
| 攻める     | 一九 |
| 毘の字の旗   | 二四 |
| 後記      | 二九 |



上杉謙信異聞

——  
謀略川中島

關東管領

上杉憲政

天正七年戰死  
天文二十一年、北条氏康二殺サレタ  
竜若丸

輝虎（長尾景虎を養子とし謙信となる）

越後守護代

明應七年越中ノ戰死  
長尾能景

天文五年死  
為景  
天文二十二年死  
晴景

女  
天文十一年戰死

景康  
慶長十四年死

女（長尾政景室、景勝母）  
天文十一年戰死

景房  
天正六年死

景虎（政虎・輝虎）

景勝（養子）  
天正七年戰死  
景虎（養子）

上田領主

長尾政景

女（上条彌五郎義春室）  
永祿九年死

義景  
元和九年死

景勝  
天正七年死

女（上杉三郎景虎室）

上杉・長尾關係圖

## 序章

### 政景の死　その一——越佐資料より

(永祿七年四月)十五日、ヒノトイ亥丁 武田信玄、アシナ芦名盛氏ヲ誘ヒ、輝虎関東在陣ノ虚ヲ衝カシム、盛氏之  
ニ応ジ、是日、コノヒ其將小田切弾正忠ヲシテ、越後菅名莊ヲ侵シ、シシトウ神洞・イカズサ雷ノ地ニ掘ラシム、輝虎ノ兵  
撃チテ之ヲ破ル、ノイ尋デ、信玄、兵ヲ信濃・越後ノ境ニ出シテ、野尻城ヲ攻陥ス、輝虎ノ兵撃テ之ヲ復  
ス、又、盛氏和ヲ請ヒ、輝虎之ヲ納ル、

(六月)十四日、キノトリ乙酉 輝虎、兵ヲ信濃ニ出サントシテ諸將ノ参陣ヲ促ス、

(七月)五日、キノトリ乙巳 越後坂戸城主越前守長尾政景、野尻池ニ遊ビテ溺死ス、

(八月)三日、キノトリ乙酉 輝虎、信濃川中島ニ陣シ、武田信玄ト会戦シテ雌雄ヲ決セント欲シ、之ヲ佐

竹義昭ニ告ゲ、北条氏康ノ兵ヲ、武蔵・上野ノ境ニ牽制センコトヲ求ム、

## 政景の死　その二——上杉年譜より

永祿四(七)ノ翌年七月五日、上田城主長尾越前守政景卒去、政景残暑ヲ消セン為、野尻ガ池ニ舟ヲ浮  
 べ、終日遊宴アリ、相從フ面々モ興ニ乗ジ、沈湎ニ及ブ、宇佐美駿河守定滴水嬉ヲナス処ニ、政景モ  
 此遊戯ニ乗ジ、共ニ水中ニ入、一游一泳、其楽ミツクスベカラス、政景イマダ水嬉ニ熟シ玉ハザルニ  
 ヤ、波底ニ顛倒シ、事スデニ危急ナリ、船中ノ輩大ニ騒動シ、援ケ救ハント欲レ共、皆酔狂ノ面々  
 ニテ、周章ノ間ニ政景終ニ溺死シ給、船ニ在合フ從臣関谷佐衛門、国分彦五郎、内藤左近、売間又  
 二郎等モ水中ニ溺死ス、(中略) 政虎(兼信)公聞シメサレ、悲哀慘慟ナヲ余リ有、政景ハ御一族ト云、  
 御姉婿ト云、殊ニ武勇智謀ノ驍将ナレバ、政務軍策ハ必、政景ニ識量シ玉フ、老将壯士是ヲ聞、悲  
 傷ノ涙ヲ流サズト云者ナシ、政景二男二女アリ、嫡男ハ右京亮義景、二男ハ喜平次景勝公是也、其節  
 景勝公ハイマダ幼稚ニヲハシマシテ、春日山ノ城辺中ノ城ニ招キヲカレ、家の老臣宮嶋三河守ヲ以テ  
 保衛セシム、上田ニ居ケル将士七十余騎ヲバ、沼田(上野)・飯山(信濃)・市川ノ要地、或越中諸城  
 ノ鎮兵トナサシム、

## 政景の死 その三——野史より

政景、本名義景……藏人と称し、又越前守と称す。謙信の姉をめとる。天文十二年。政景謙信を輕んじ、その邑を併せんと欲して、兵八千をひきい戦に赴きて克たす。十四年、政景勢屈し降を乞ふ。謙信は政景の勇敢を嫌忌す。政景、上田城に居り、剛勇善闘、地藏嶺之戦に一隊の兵を以て武田信玄と戦い、飯富虎昌等五隊を撃ち、小山田昌辰を獲たり。謙信猜忌し、これを野尻城に寘し、甲（甲斐）の備へとなす。宇佐美定行、相備へたり。永祿七年五月、謙信、定行と議し、政景を撃たんとす。定行涙を擲して諫めて曰く、「彼は同族にして、かつ姉婿たり。故なくこれを撃つは不義なり。汚名をいかにせむ。ただに政景のみにあらず、上田もし反せば、わがために大いに利なからむ。請ふ止めむ」と。聴かず。定行曰く、「もし然らば、臣一の謀あり。上田を起たしめず、又世評を汚さずして獲む」と。すなわち辞して、柿崎の琵琶島城に帰る。六月季までに野尻にゆく。政景を誘ひ、城下の池に輕舸に乗る。かつて船匠に謀り、舟底を穿ちあり。衲を脱し、政景および左右数人と俱に溺死す。政景時に年三十九。定行七十六。実に七月六日なり。定行、一封の書を遣りて曰く、「臣かつて君を諫めて聴かれず。故に老軀をなげうちて政景と俱に溺死せむとす。請ふ、臣の後を置くことなれ。もしこれを置かば、政景の徒恐らくは服せざらむ。ただ臣一人に罪を帰せしめよ」と。謙信歎き惜しむ。

# 政景の死　その四——国分威胤見聞録より

御同船にて死せし国分彦五郎が母、其夫新左衛門と上野国にありしが、六月下旬、墓参を心懸て上田に來り、彦五郎が宅に居たりしに、七月五日、野尻の池にて喧嘩ありて彦五郎御供死せしと聞き、彦五郎が弟同年に生れて、此時共に九歳なりたる左馬介正胤・次郎右衛門胤成を左右に連て、死体の迎に出、漸待受、走寄つて聞きしに、彦五郎にあらで、政景公の御死体なりしかば、急に仕廻たりしに、御肩の下に疵あり云々、此婦人米沢迄來り、寛永十二年八月九日死去、閑興庵に葬る。